

吉田健一著作集

XXIX



思ひ出すままに
怪奇な話

集英社

吉田健一著作集 第二十九卷

思ひ出すままに 怪奇な話

昭和五十六年一月二十日 第一刷印刷

昭和五十六年二月四日 第一刷發行

著者 吉田健一

發行者 堀内末男

發行所 株式會社集英社

東京都千代田區一ツ橋二丁目五番地一〇號

電話 東京 (二三〇) 六三六一 〈文藝出版部〉

東京 (二三八) 二七八一 〈販賣部〉

整版所 株式會社中臺整版

印刷所 大文堂印刷株式會社

製本所 株式會社石橋製本工場

© 1981 Nobuko Yoshida, Printed in Japan
0395-171029-3041 落丁本・亂丁本はおとりかへします

吉田健一著作集第二十九卷 目次

思ひ出すままに

五

怪奇な話

三三

山運び

三三

お化け

三四

酒の精

三六

月

三七

幽霊

三九

老人

三六

流轉

三四

化けもの屋敷

三五

瀬戸内海

三七

解題

三九

思ひ出すままに

I

エリオット・ポオルといふ大分前に死んだアメリカの探偵小説家は日本では知られてゐない。尤も何か書いてゐて日本では知られてゐないと但し書きを付けるのは知るといふことが我が國では奇妙な形を取つてゐるからで専門家といふものがあつてこれは人間業と思へないことまで知つてゐてもそれはその専門家だけのことで一般の知識、或は常識になるに至つてゐない。それどころでなくてその一般の常識といふのは殆どないのに近いのではないかと疑はせるものがあつて専門家もその専門を離れては先づ無智と見られても仕方がない場合が多い。つまりは一般の無智をなしてゐる人間の銘々が何かの専門家であるといふ不思議な状態であつてこれに構つてはゐられないから専門を離れてものを言ふ時には紹介を略してヴァレリイとかヴィットゲンシュタインとか、或は大内義隆とかいきなり名前を擧げて問題に入り、それに付いて来るものがあることを期待する他ないのである。そのうちに我が國でも常識といふものが出来上るに違ひない。併し今の所は専門以外は無智といふのが相場のやうであつてそのことを取り上げることから始めたのも一度はそのことが言つて置きたかつたのである。

それでエリオット・ポオルに戻つてこれも我が國の探偵小説の専門家にとつては先刻承知で料理す
みのことと推定される。従つてこれは誰も聞いたことがない名前といふことになつてこの場合もその
ことに構はずに話を續ける他ない。ポオルの探偵小説家としての腕前は専門家の問題であるがポオル
に先づ惹かれて時々今でも讀み返すのはそのバリといふ町に對する愛着がその幾冊かの本で生きてゐ
るからでこれは要するにその本にバリ、更に詳しくは第二次世界大戰以前のバリがあるといふこと
になる。ポオルも初めからそのことばかり書いてゐたのでなくて *The Governor of Massachusetts* とい
ふやうな凡そ十九世紀風な長篇を書いてゐた時期もあり、それが十九世紀の英國やアメリカの小説並
に退屈なものかどうかは終りまで讀まなかつたので確めることが出来なかつた。併しポオルは色々な
ことをした後に第一次世界大戰の時に従軍してフランスに渡つて戦争が終つてからはアメリカの新聞
社のバリ特派員になつてこの町に住み着き、それが第二次世界大戰が始つて歸國するまで續いてそれ
からバリが舞臺の探偵小説その他を書き始めた。

ポオルが戦争でバリといふ町に始めて來てここに自分の町があると思ふ程氣に入つてその次に又戰
争になつてフランス在留のアメリカ人に歸國命令が出るまでの二十年間近くをバリで過したのだと考
へたい。この兩大戰の間といふのはヨオロツパの歴史の上で一つの時期を劃してゐる。それは政治的
には動搖の連續で不安極りないものだつたのと同時にヨオロツパ精神の開花といふやうなものを見た
ものでもあつてポオルも新聞の仕事をする一方でジョイス、ガートルウド・スタイン、ヘミングウエ
イその他バリにその頃集つてゐた各國の文士とともに *Transition* といふ雑誌の編輯を續けたことは
これも日本の専門家には説明するまでもない。その仕事も當時のバリといふ町に漂つてゐた空氣の中

で暮すことから自然に、或は充實した氣持の一部をなして湧き上つたものであることは想像出来る。ポオルの探偵小説にも増してその面目、或は當時のバリの面目、或は寧ろその兩方を傳へてゐるのはバリの町が直接の對象になつてゐる *A Narrow Street* と *The Last Time I saw Paris* といふ二冊の本でそこには歌がある。

ポオルの本に惹かれるのも丁度その一九三〇年代にポオルには會はなかつたのもやはりバリを見た爲であるかも知れない。又ポオルと違つてそれが最後にはならなかつたのであるが實はその頃パリに行つたのはその十年ばかり前の一九二〇年代にも暫くパリにゐたことがあつてその時の記憶を追つてだつた。それと一九三〇年代のバリは大して違つてゐなかつた。ポオルも從軍して休暇で最初にパリに來たのならばこの第一次世界大戰が終らうとしてゐるか終つた頃のバリを知つてゐた筈である。又それが十年後のバリと餘り變ることがなかつたことに基いてこの二つを一括して言ふならばそれは冬が暗くてそれでゐてそこに堆積された時間で冬でも妙に明るい感じがする町だつた。その時間とか文明とか歴史とかいふことを省くならば冬が所謂、社交の季節でもあつてさういふ着飾つたのが大きな車に乗つて行つたり來たりするといふ風に考へてもいい。尤もそれを見て明るい氣分になるといふのも疑問の餘地があつてその氣分になるのは寧ろそのやうに盛裝した群が集つて音楽が聞える大廣間に降りて行きでもする時であり、その頃もさうしたことには縁がなくてポオルはあつたのだらうがその本では書いてゐない。

まだ一九二〇年代の頃雨が續いてセエヌ河の水嵩が増したことがあつた。それが岸まで溢れるには至らなかつたが河添ひの公園にあると河を行く舁が橋の下を潛るのに煙突を倒すのが面白くてさうい

ふ仕掛けになつてゐることを始めて知つた。これが暫く續いて或る日向うから子供を一人連れて歩いて來た老人が河を見て *mechant* Seine と子供に言つたのを覚えてゐる。併しそれが本當に老人だつたのかどうか。一體に若い時は年上のものが皆年取つて見えるものである。その橋が確か Pont Alexandre III だつた。後は Pont Neuf 位しかもうパリの橋の名前を覚えてゐない。同じく記憶を辿つてのことではこのアレクサンドル三世橋といふのか何といふのかは橋を支へてゐる石の柱に各種の軍裝をした兵隊が彫刻してあつてこれは或はアレクサンドル三世がパリに來た時に歡迎する爲に河に掛けた橋で兵隊は當時のロシアのかと思つたこともあつた。パリといふのはそれとかその傍のやはりセエヌ河添ひにあるルウヴル博物館のその頃は黒ずんだ建物とか着飾つた群衆に滿された大廣間とかがどういふ具合にか一つのものになつてゐる町である。

さういふことが記憶に戻つて來たのもまだ所謂、占領時代だつた頃にポオルの本を讀んでたつた。

ポオルは夏が終つてアメリカの觀光客が歸り、それでも避暑に出掛けたパリの人間が戻つて來るまでに少し間があつてパリが殊の外に靜かに感じられるといふやうな季節を選んで書く。その書き方から察すればポオル自身がパリのさういふ季節を繰り返して樂んだので第一次世界大戰が終つた一九一八年も勘定に入れば次の大戰が起つた一九三九年までその機會が二十一回あつて他の季節も入れて二十一年間ポオルがパリでの暮しに浸つてゐたことになる。それがポオルのものを讀んでゐてそれに浸つてゐない時は羨しかつた。確かに一九三〇年の冬にはパリにゐてルウヴル博物館その他が普通にあるのを確めたのだつたが既に文學の亡靈とでも呼ぶ他ないものに取り憑かれてゐたやうでまだ讀んだことがない本が多過ぎるのに苛まれてゐた。その頃ポオルが書いたものが既にあつてもポオドレエ

ルが讀めるのにと思つたに違ひない。

それから十五、六年たつてポオルに身代りになつて貰つてバリを樂んだのだと考へられる。その下地が出来てゐたのは實物を見たことがあるからであつてもそれならば人間は無意識か半ば無意識のうちに随分何かと頭のどこかに貯へるものである。クウル・ラ・レヌに迷ひ込んでミユッセの詩を刻んだその像を見てはまだその詩も讀んだことがないと思ひながらも後にセヌ河が流れてゐるのは感じてゐたらしい。ポオルの小説によく出て來る場所にモンパルナスのどこかの四つ角に角毎にカフェが一軒あつてそこを圍んでゐる形になつてゐるといふのがあつてそのカフェの前も通つたことがあるやうな氣がした。併しもしさうだつたのであつてもそのカフェの一軒で時がたつて行くのが樂めたかどうか疑しい。恐らく手にはポオドレールの詩集を持つてゐて字引も持つて來なかつたのを悔んだのではないだらうか。それだから思春期、或は青年時代、或は要するに若いうちといふのはやり切れないのである。

やはりポオルの探偵小説の一冊で主人公がその女友達と十七世紀の樂器ばかりの音樂會に行く所がある。そこで擧げてある幾つかの作曲家の名前は百科事典を引いてもなかつたからポオルの創作らしいがさういふ音樂がヨオロツバの十七世紀にあつたことは調べなくてもその書き方で解る。それが氣の毒なことにその音樂會が終つた後で探偵でもある主人公が盜難事件に巻き込まれるのであるが會場で音樂が響くことは確かであつてバリでのその經驗もポオルを通してであるとはこれは必ずしも言へない。併しポオル、或はその小説に出て來る人物のやうには行かなかつたのであのこちこちした緊張の仕方まで青年時代の惡夢だつたと考へたくなつてもう一つ別なことに氣が付く。これも我が國での

専門家による知識の獨占、或は寧ろ無數のさういふ人間による知識の奪ひ合ひと結び付くことも知れなくてただ知るとか學ぶ、或は好きだからその好きなことをしてゐるうちにそれが身に付くといふことが少くともかなり最近まで我が國で認められてゐなかつた。それが昔からさうだつたといふのではない。鷗外のドイツ留學時代の日記を見てもつと自然に學ぶべきことは學んでそれを他のこととともに樂んでゐる様子が窺はれて昔から日本人が今日でも大して減つてゐると思へない知識のがりがり亡者でなかつたことが解る。

恐らくこの陋習は立身出世といふことが盛だつた大正の頃の遺風であつてその勉強して偉くなるといふ凡そいぢけた考へが少しでも勉強するのに似たことと一緒にされて好きな本を讀むのにもそれを讀むものにさへ一種の態度が強ひられたといふ説明が頭に浮ぶ。それが何れは音楽は藝術、従つて音樂會に行くのは嚴肅極らないことといふ風な偏屈に發展したこともさうなれば全く不可解なことである。併し厄介なのはその音楽とか日本では文學と呼ばれた小説その他とかがその本場ではこの畏つた態度と正反對のものから始り、又育つて今日に至つてゐることで自由でなければならぬものにこの雁字搦めの心構へで接するのに就てはその對象が外國から來たものであるといふ觀念が付き纏つてゐることが更に考へられる。併し能を見に行くものはどうか。その能も曾ては江戸の町人が江戸城内で觀世が舞ふのを見物しに行くことを年に一度許されたものでその興行には將軍家も出席するのが普通だつた。

併しこれは要するにバリでこちこちになつてゐて後になつてエリオット・ポオルの本を讀んで若氣の過ちを認めたといふことである。それもただそれだけのことでヨオロツパと日本が違ふやうなこと

はそこにならない。或はあつても大した違ひではなくてそれが非常にあるといふ考へも外國に行つた日本人を窮屈にしたのであるよりも日本に外國から入つて來た音楽その他の受け取り方に餘計な制約を加へるのを手傳つた。その音楽も文學もそれまでの日本になかつたものといふ建前からその日本になくて外國にあるものに就て更に何かと説明が試みられた結果がさういふことを念頭に置いてゐれば外國のものも解ることになつた。ただ解るのでなくてその説明を忘れては又解らなくなるのでそれが外國人に必要でないのは考へて見れば外國人だからでなくて日本人にもそのやうなものが實際には必要でないことを示してゐる。ただ讀むとか聞くとかすることが我が國になくなつてから久しくてそれが最近ではさうでもなくなつた感じがするのはこれで専門家の數が減ることでもあるのかも知れない。

十七世紀の樂器だけを使つた音樂會があるポオルの探偵小説ではルウヴル博物館から盜まれるのがワットオの小型の繪でこれが主人公の探偵の努力でしまひに戻つて來る。併しそれが警察のものに發見されるのが或る精神病院の殊の外に話にならない惡漢の院長の寢室でその繪をそこに掛けて置くのがその探偵なのである。そしてそのことを知るものは探偵以外に誰もなくて院長が公判に付されるとこの男は自分が實際に行つた惡事の數々をごまかすのに馴れ過ぎて自分がしたことがないことの言ひ逃れをすることに掛けては全く無能になつてゐる爲に有罪を宣告されてこれは曾てドレイフュス事件のドレイフュス大尉も送られたことがある例の中米にある佛領の惡魔島に流刑に處される。これはその所の荒筋を書いただけでその感じを傳へたことにならないが免に角そこを讀んで我々が快哉を叫ぶのでなくて全く文句はないといふ氣がするのが poetic justice といふ言葉が曾ては用ゐられたことがあつたのを思ひ出させてこの充足は前に舉げた音樂會の場面と同じである。

そのことが大事なのである。一體に詩の正義といふのもこの充足を指してゐるやうであつて何か讀んで勸善懲惡的に許すことが出来ないことは許して置けないといふ氣分になるならばそれは本を讀んでその文章を樂むこと、要するに本を讀むことと別種の行動を起すことを迫るものであつて宣傳や煽動が先づ文章にならない理由もそこにあると見られる。極言すれば言葉を有効に用ゐるといふことの中にさうした類の目的は入つてゐなくて宣傳や煽動には言葉といふものを全くその意味に限定することが求められてそれが餘りに見事になされて我々の印象に残るものがあるならばそれで我々が宣傳に乗せられてゐるのでも煽動されてゐるのでもなくてただ言葉を樂むといふことをしてゐるのである。それ故に夏が終つてアメリカの觀光客が歸り、まだ避暑に出掛けたパリの人間が戻つて來てゐない季節といふこともその通りでなければならぬことを我々に認めさせる。ポオルはその季節での夕方の時刻を選んで話を進めてゐてその爲にロングフェローまで引用してゐる。

我々は不満を覺える爲に本を讀むのではない。その一九三〇年のパリでボオドレエルを讀んでゐてそのことに氣が付かなかつた事情を分析して見ることで面白いことが解るので我々が詩に動かされる時はそこで語られてゐる狀況もその通りに受け取り、まだ詩に動かされてゐる頭で考へてその狀況の外觀、言葉ならばその意味に相當するものも自分を動かしてゐるものの中に含める。それで悲嘆とか苦悶とかも自分に働き掛けてゐると解釋することにもなり、その爲に生じるのが絶望の詩人だとか白鳥の歌だとかの極り文句である。併し絶望は我々自身の責任で處理することで心を動かす材料にならず所謂、白鳥の歌も悲しいのでなくて冴えて響くのでなければやはり人に働き掛けることがない。我を動かす詩の狀況はその狀況そのものであつてその根柢をなすものはそこで言葉が傳へる一つの充